

第一章 旧石器時代

第一節 旧石器時代の概観

ヒトと道具

ヒトは二本の足で直立歩行することによって脳を発達させ、手を使って道具を作ることによって文化を發展させてきた。地質学上の第四紀（約二〇〇万年前～現在）は『人類紀』とも呼ばれ、ヒトが地球上で繁栄した時代である。人類の起源は、最近の研究によると約四〇〇万年前に遡るといわれ、猿人・古人・旧人・新人の階梯で進化したことが知られている。

ヒトの歴史は、製作・使用した道具の素材により、石器時代・青銅器時代・鉄器時代という変遷をたどるが、その大部分は石器時代であった。石器時代はさらに地質学上の更新世（洪積世とも呼ばれ約二〇〇万年前～一万年前）に属し、主として打製石斧を用い、狩猟・採集生活を営んだ旧石器時代と、完新世（沖積世とも呼ばれ一万年前以降）に属し、磨製石斧を用い、農耕・牧畜と土器の使用を特色とする新石器時代に大別されている。

旧石器時代は、通常、前期（約一五万年以前、古人の時代）、中期（約一五万～三万年前、旧人の時代）、後期（約三万～一万年前、新人の時代）に区分されているが、日本では約三万年以前のものを前期、それ以後のものを後期とする二分法も用いられている。

岩宿の発見と日 日本最古の石器文化は、長く新石器時代に属する縄文文化と考えられていたが、昭和二十四年の更新世人類 (二五五) 群馬県岩宿遺跡の発見によって、さらに古い文化の存在が明らかとなった。この文化は

石器をもたないことから、当初、無石器文化と呼ばれたが、その後先石器文化の呼称が一般化した。しかし、近年旧石器文化として、世界的な石器文化の流れの中で理解しようとする傾向も定着しつつあるので、本書では旧石器時代の呼び名を用いた。

岩宿遺跡の発見以来、日本各地からは約三〇〇〇か所以上におよぶ旧石器時代遺跡が発見されているが、その九パーセントは約三万年前以降の後期旧石器時代に属するものである。数多くの旧石器時代遺跡が存在するにもかかわらず、わが国での旧石器時代人骨の発見は少ない。その最大の原因は、多雨な気候の影響で酸性の強い日本の土壌にある。酸性土壌では骨は溶解され、永年土中に残存することが困難だからである。

日本の更新世人類は、昭和六年 (一九三三) 直良信夫によって兵庫県明石市から発見され、後にニッポナントロプス・アカシエンシスと命名された明石原人の腰骨があるが、現物が戦災で失われた上、最近その原始性に疑問ももたれている。現在、確実性のあるものとしては、愛知県豊橋市発見の牛川人^{うしかわ}が旧人級のものとしては唯一の例と認められている。牛川人は成人女性の上腕骨で、身長一三五センチメートルと推定され、低身長である。ほかに、浜名湖周辺の石灰岩地帯からは三ヶ日人^{みつかひ} (静岡県三ヶ日町) や浜北人^{はまきた} (同県浜北市) などの化石人骨が発見されているが、いずれも新人級の断片で、身長一五〇センチメートル以下と低く、縄文人とよく似るといわれている。一方、九州では大分県の聖岳洞穴^{ひじりだほ}から、旧石器時代末期の石器をともなって成人頭骨が発見された。聖岳洞穴人と呼ばれるこの人骨は、頑強で大柄、中国北京の周口店上洞人に類似するといわれている。



図 I-1 港川人

沖繩では旧石器時代の遺跡は明らかでないが、昭和四三年（一九六八）那覇市郊外具志頭村港川の石灰岩採石場から数体分の良好な人骨が発見された。港川人と呼ばれるこの人骨は、放射性炭素による年代測定の結果、約一万八〇〇〇年前のものであるという数値が得られ、新人段階のものであることが判明した。鈴木尚によれば、その特徴は男性の身長一五五センチメートル、女性が平均一四四センチメートル、顔の特徴は額が狭く、眉間から眉の上にかけて強く隆起し、頬骨の張った四角い顔で、中国華南の柳江人に近く、全体的に縄文人の祖型と考えられることが指摘されている。

ウルム氷期の動植物相

第四紀更新世は、寒冷な氷河期と比較的温暖な間氷期が繰り返された時代である。ヨーロッパのウルム氷期の六回の氷期が確認されている。氷期と間氷期の交替は氷河性海面変動という海水準の変化をもたらし、地殻変動や活発な火山活動とともに、当時の地理的環境は現在とはかなり異なったものであった。

日本の旧石器時代遺跡の大部分は最後のウルム氷期（約一〇万～一万年前）に属し、約二万年前がもっとも寒冷な時期であったとされている。当時の気温は現在より六、七度年平均気温が低く、東京が海拔一五〇〇メートル前後の霧ヶ峰高原や尾瀬ヶ原と同様の気候であったと考えられている。海面は現在より約一〇〇メートル前後降下したため、東京湾はすべて陸化し、また、水深の浅い間宮海峡・宗谷海峡は勿論、対馬海峡や朝鮮海峡も陸橋となって大陸と陸続きになっていたものと想定されている。そのため、日本には北と西の陸橋を渡って各種の動物が渡来し、人間もそれらの動物を追って移り住んだものと思われる。

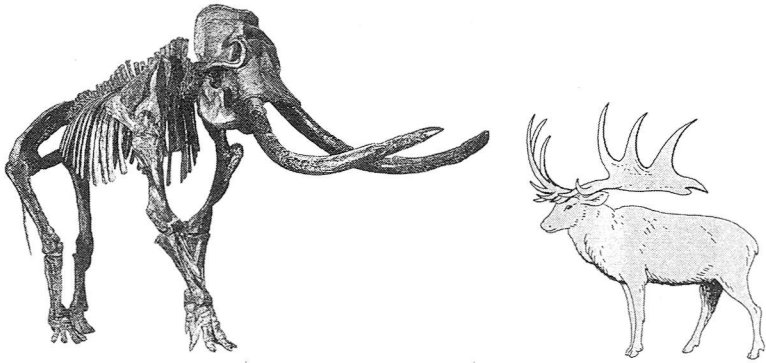


図 I-2 旧石器時代の動物 (ナウマンゾウとオオツノシカ)

ウルム氷期の動物相は、岩手県花泉遺跡や長野県野尻湖遺跡からの出土が有名で、ナウマンゾウ、オオツノシカ、ヘラジカ、野牛などの大型哺乳動物化石が集中的に発見されている。こうした状況から、両遺跡とも旧石器時代人の狩猟、解体の場（キル・サイト）と推定されている。また、北海道からはマンモスゾウの化石も発見され、旧石器時代の日本には北からヘラジカ、ヒグマ、野牛など亜寒帯系のマンモス動物群が、西からはナウマンゾウ、オオツノシカ、ニホンムカシジカなどの黄土動物群が渡来し、混在して棲息していたことが知られる。

植物相では、中野区江古田^{えごた}泥炭層の植物群がよく知られている。江古田泥炭層（放射性炭素による年代測定で約二万九〇〇〇〜一万二〇〇〇年前）はウルム氷期の最寒冷期を含む時期の植物化石群で、カラマツ、チヨウセンゴヨウ、トウヒなどの針葉樹に、落葉広葉樹のブナ、ミズナラなどを含み、寒冷な様相を示している。また、最近報告された小金井市野川中洲北遺跡の第Ⅱ泥炭層（約二万一〇〇〇〜一万三〇〇〇年前）は、カラマツ、トウヒ、チヨウセンゴヨウ、ハシバミなどの亜寒帯針葉樹林が卓越し、寒冷な気候を示している。同様の様相は岩手県花泉遺跡、長野県野尻湖遺跡での花粉分析などによっても裏付けられている。

考古学と年代

相対年代と 歴史を研究する上で、年代を正しく知ることが不可欠である。まして、何千年、何万年という古い過

絶対年代 去を対象とする考古学では、年代決定は最重要課題である。

考古学という年代には、相対年代と絶対年代の両者がある。相対年代は考古学本来の年代決定法である。土中に埋没している土器や石器などの遺物は、地層が攪乱されずに堆積している場合は、上層のものより下層のものがより古いということになる。これは層位学的方法と呼ばれ、年代決定の重要な根拠となる。一方、机上でモノの形態的変遷を跡づけて、新旧の序列をつける型式学的方法がある。作業仮説として編成された型式学的序列は、層位学的方法によって検証され、初めて正しい年代的序列が与えられることになる。

絶対年代には紀年銘のある遺物と、理学的方法による年代測定がある。前者では、例えば、奈良市郊外で発見された太安麻呂墓おののやすまろのように「養老七年」(七三〇)と記された墓誌をもつものは暦年代が明らかとなる。理学的方法には放射性炭素年代測定法(14C年代法)、熱ルミネッセンス法、フィッシュン・トラック法、カリウム20アルゴン法などがある。中でも14C年代法はもっとも広く用いられている。

14C年代法はシカゴ大学のW・F・リビーによって開発されたもので、彼はこの成果でノーベル物理学賞を受けた。この方法は、地球上の生物は一定の割合で14Cを体内に取り入れるが、死ぬと炭素の供給を断たれ、14Cの保有量を次第に減じ、約五五〇〇〜五七〇〇年で半減する。したがって、14Cの保有量を測れば死後の経過年代がわかるというものである。この方法では、過去数万年間、14Cの濃度は地球上のいかなる場所でも、常に一定であったとする前提

条件がある。しかし、より精度の高い年輪年代法の結果などと照合した場合に誤差を生じており、最近では樹輪補正もおこなわれている。少なくとも前提条件の一部は崩れている点、注意をはらう必要がある。

熱ルミネッセンス法とは、鉱物を加熱して一度発光させると蛍光を発し、発光能力がゼロとなる。しかし、その後放射線が蓄積されるとふたたび発光能力をもつ。即ち、土器は焼成時に蛍光を発し、放射線量がゼロとなる。そこで、出土した土器の現在の放射線量を測れば、経過年代を算出できるという方法である。一〇〇万年前ぐらいまでの測定が可能といわれる。

フィッシュン・トラック法は、鉱物に含まれるウラン (^{238}U) の核分裂 (フィッシュン) による飛跡 (トラック) を数える方法で、ウランの飛跡は加熱によって消えるので、土器に含まれる鉱物の飛跡を数えることによって年代を知ることができる。

こうした理学的年代は、数値として何年前という値が算出されるが、測定の誤差や数々の前提条件の上に成立していることを忘れてはならない。したがって、算出された絶対年代を暦年代と同一視することはできない。考古学的成果を十分考慮し、複数の方法を併用しながら参考として取り扱う必要がある。

第二節 武蔵野の旧石器文化

石器の種類 旧石器時代人の財産は、有機質のものの大部分が失われているため、ほとんどの遺跡では石器類に過ぎられている。しかし、条件に恵まれた一部遺跡では骨角器や木製品の存在も知られている。

石器の製作には、礫れきをほかの石や角・骨・木などで敲打こうだして作る直接打法と、礫とハンマーの間にパンチを挟む間接打法がある。また、打ち割った礫の鋭い切れ口を刃部とする礫核石器と、一個の礫から多数の剝片はくへんを割りとって製品化した剝片石器の区別がある。旧石器時代人はこうした技術を駆使して、各種の石器を製作したが、次に主要な石器の特徴を摘記しておこう。なお、石器の用途については、その形状から切断や刺突などの機能が想定される場合や、未開社会での研究も参考となる。最近では石器に残された微細な使用痕を顕微鏡で観察し、使用方法を推定する方法や、石器に付着した脂肪酸分析によって、狩猟対象動物を特定しようとする研究もおこなわれ、宮城県馬場壇ばばだんA遺跡出土の石器からナウマンゾウの脂肪酸が検出されたことも報じられている。

○礫器 礫の一端に打撃を加えて粗い刃部を作り出した石器で、片面だけ刃をつけたものをチョッパー、両面から交互に刃をつけたものをチョッピング・ツールと呼んで区別している。

○ナイフ形石器 原石から剝離された剝片の鋭い一側縁を刃部とし、基部や背面に刃潰し加工した石器である。日本の後期旧石器時代を特徴づける石器で、時期や地域による形状差がみられる。北海道を除く各地から出土し、ナイフとしての用途と、刺突具としての機能も想定されている。

○搔器 縦長剝片の先端に湾曲した刃部をもつ石器で、エスキモーの例などから皮をなめす道具であろうと推定されている。

○削器 縦長剝片の側縁に直線的ないしは湾曲した刃部をもつもので、削ったり、切ったりする機能をもつ。

○石斧 礫の周辺に加工を加えて、重量感ある斧としたもので、打製のもののほか、刃部を磨いた局部磨製石斧がある。木材の伐採や加工などに主として使用されたと思われる。

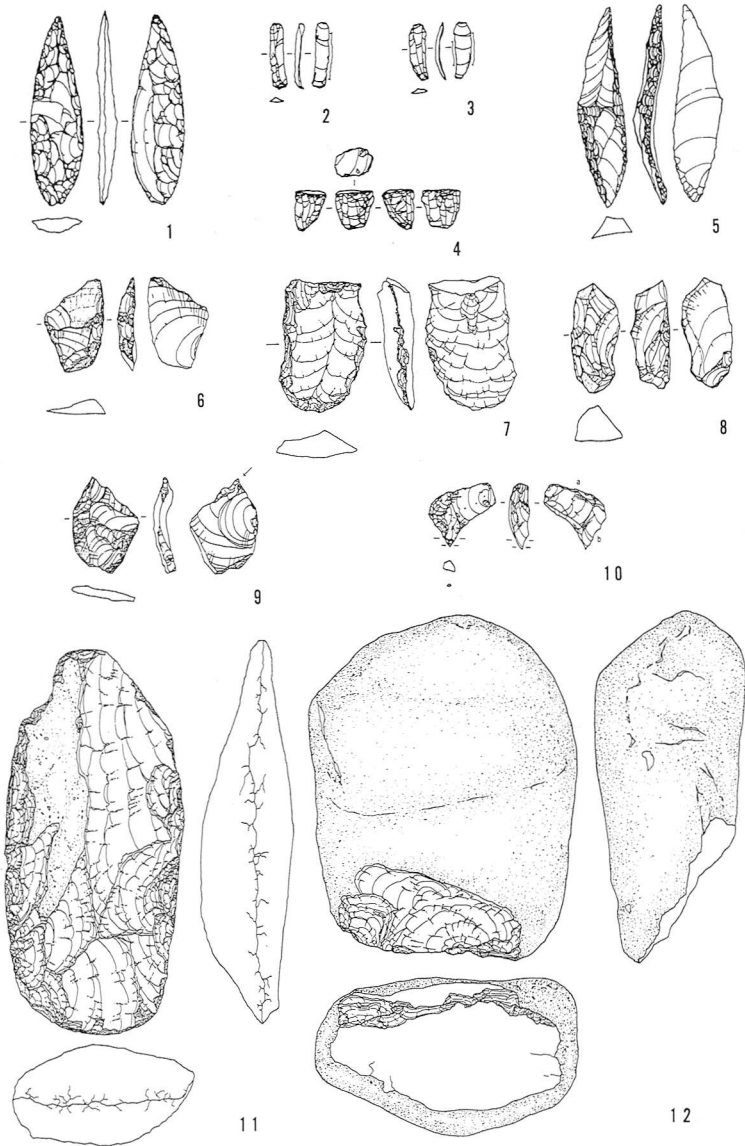


図 I-3 旧石器時代の石器

1. 槍先形尖頭器 2・3. 細石刃 4. 細石核 5・6. ナイフ形石器
7. 搔器 8. 削器 9. 彫器 10. 錐 11. 石斧 12. 礫器

○彫器 ちようき 彫刻刃形石器とも呼ばれ、剝片の一端に細長い槌状の剝離をもつ石器である。彫刻刃のような機能をもつて、木・骨・角などに溝を刻むのに用いられたと考えられる。

○錐形石器 きりがたけつぎ 剝片の先端を錐状に尖らせて穿孔するための道具で、揉錐器とか石錐と呼ばれる。

○尖頭器 せんとうき 先端を尖らせた石器を一般に尖頭器と呼ぶが、木ノ葉形に両面ないし片側から調整された優美なつくりのものは槍先形尖頭器または石槍などと呼ばれている。柄をつけて突き槍や投げ槍としたもので、狩猟具の典型である。

○細石器 細石核から剝離された幅五ミリ、長さ二、三センチメートルの細石刃を骨や木の柄に刻んだ溝にはめ込んで、槍やモリのように使用した石器である。旧石器時代末期に特徴的な石器である。

石器文化の 旧石器文化の編年は、研究の初期段階では石器の型式的分析を基に進められたが、一九七〇年代の野

変遷

川遺跡（調布市）などの広範囲の調査を機に、石器を包含した出土層位の相対的対比によって組み立てられるようになった。この場合、広範囲に降下した、いわゆる広域火山灰層の検出は、遠隔地間の地層対比にきわめて有効である。九州南端、鹿児島湾の始良カルデラは約二万一〇〇〇年前の火山活動で形成され、この噴火の際の火山灰層（A T層）は北海道を除く日本全土に降灰している。そのため、出土した石器群がA T層の上か下かで、大きく時間的序列をつけることが可能である。また、関東地方では富士、箱根などを給源とする火山灰層（関東ローム層）が厚く堆積し、地層の細分化が進められているので、出土層位を特定して編年の位置づけを考えることが可能である。

旧石器文化の変遷は、小林達雄のようにナイフ形石器を基準とし、その出現以前、盛行期、消滅期の三期に区分する巨視的な編年の提案がある。また、地域的には武蔵野台地での石器群の消長を四期に大別する小田静夫らの研究が

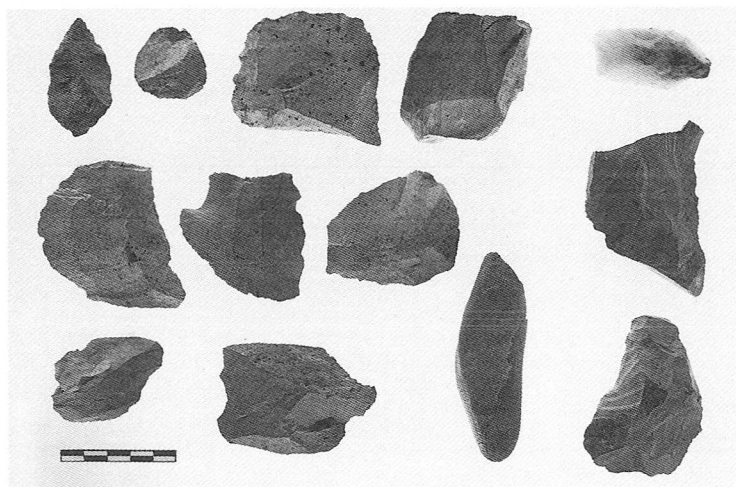


図 I-4 多摩ニュータウン No. 471-B 遺跡の石器『日本考古学年報』40 より

ある。さらに、近年、宮城県座散乱木遺跡や馬場壇A遺跡など、三万年を超えるいわゆる前期旧石器の存在も徐々に明らかとなっている。

**武蔵野台地の
旧石器文化** 火山灰の堆積による関東ローム層（赤土）は上から順に立川ローム層、武蔵野ローム層、下末

吉ローム層、多摩ローム層に細分されている。南関東でこれまで発見された旧石器文化は、いずれも最上位の立川ローム層（約三万年～一万年前）中に包含され、後期旧石器時代に相当する時期のものであった。ところが昭和六三年（一九八八）多摩ニュータウン内の稲城市坂浜にあるNo. 471-B遺跡では、さらに下位の武蔵野ローム層中の東京軽石層（約五万年前）を挟んで上下から石器が発見された。

多摩ニュータウンNo. 471-B遺跡の東京軽石層上層の石器群は、流紋岩製の尖頭器、楔形石器、削器のほか、砂岩製の敲石などを含んでいる。また、下層からはヘラ形石器などが発見された。武蔵野ローム層中からの石器発見は、従来の認識を超えるもので、今後こうした遺跡の増加が予想される。しかし、現状ではこれら

の石器と東北地方で発見された、いわゆる前期旧石器との類縁関係は十分把握されていない。

武蔵野台地の旧石器文化は、野川流域を中心に小田静夫らの研究から、大きく四期に分けられ、さらに小文化期に細分されている。変遷の概要は大略次のとおりである。

第Ⅰ文化期

立川ローム層下部の第Ⅴ層から第Ⅹ層にかけて認められ、ナイフ形石器の出現と、打製石斧や局部磨製石斧を特徴とする。杉並区高井戸東遺跡、小平市鈴木遺跡、府中市武蔵台遺跡などが知られている。本文化期はa・b・cの三つの亜文化期に細別される。

第Ⅱ文化期

立川ローム層第Ⅲ層下部から第Ⅴ層上部に位置し、ナイフ形石器の盛行を特徴とする。ほかに搔器・彫器・尖頭器などを含むとともに礫群の発達をみる。調布市野川遺跡をはじめ、野川流域に多くの遺跡が点在する。本文化期もa・b二つの亜文化期に細分され、第Ⅱb亜文化期には両面調整の小形尖頭器が出現する。矢川流域に最近発見された国立市峰上遺跡などはこの時期に含まれる。

第Ⅲ文化期

立川ローム層第Ⅲ層中部に包含され、細石刃・細石核を特徴とする文化で、ほかに削器や礫器などが伴出する。小金井市新橋遺跡、同はけうえ遺跡、同野川中洲北遺跡などがある。

第Ⅳ文化期

立川ローム層第Ⅲ層上部に位置し、大型の両面調整尖頭器を特徴とする。礫器や削器のほか、ときに土器をともなう場合もある。小金井市野川中洲北遺跡、同平代坂遺跡のほか、狭山丘陵上の瑞穂町狭山遺跡、同六道山遺跡をはじめ、立川市砂川地区などの遺跡も知られている。

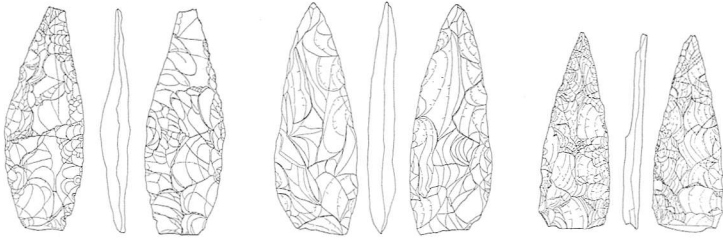


図 I-5 福生市内採集の槍先形尖頭器 (左端、長さ 6.7 cm)

第三節 福生市と周辺の旧石器文化

槍先形尖頭器の採集

福生市内からはまだ明確な旧石器時代遺跡は発見されていない。今後発見されるとすれば、市の北東部、立川段丘上にかぎられよう。ただ、長年にわたって市内各地から石器を採集された井上九万兵の採集品の中に、旧石器時代末期に属すると思われる三点の槍先形尖頭器が含まれている。尖頭器はいずれも現存長六、七センチメートルで、両面加工の柳葉形で鋭利な先端部を有する。石材は黒曜石やチャートなど硬質のもので、木製の柄に着けられて突き槍に使われたと思われる。これらの尖頭器は第IV文化期の所産と推定され、採集地点は八高線東福生駅周辺の立川段丘面とされている。現在、この付近には明確に遺跡と認定できるような場所はない。しかし、ほかに石鏃などが採集されたという報告もあり、横田基地内を含めて、立川段丘上に旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が存在する可能性は大きい。

福生市周辺の旧石器時代遺跡は、瑞穂町の狭山丘陵上に狭山遺跡・浅間谷遺跡があり、ナイフ形石器などのほかに旧石器時代末葉の槍先形尖頭器が多いのを特徴とする。また、高燥な台地上の立川市砂川地区にも旧石器時代遺物を出土する地点が点在し、多摩川から離れた上位段丘にも、かつて水利に恵まれた地があり、旧石器時代人が生活できる環

第3節 福生市と周辺の旧石器文化

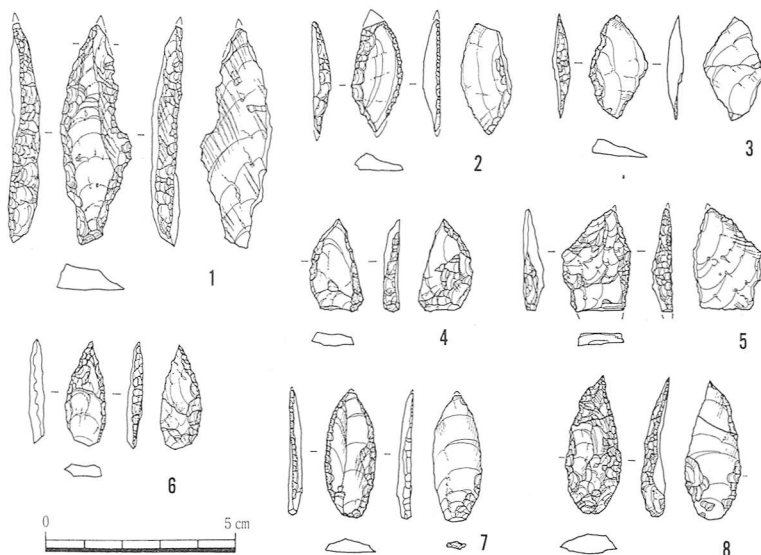


図 I-6 峰上遺跡（国立市）の石器（1～5 ナイフ形石器、6～8 尖頭器）

境のあったことも考えられる。福生市の立川段丘上から発見される遺物も、そうした一部と思われる。

周辺の旧石器時代遺跡 西多摩地域では、旧石器時代遺跡の発見はまだ少ない。そうした中で、青梅市域では

今井城の越遺跡から、第Ⅱ文化期のナイフ形石器五点と石核、刃器などが発見された。また、霞川流域の馬場遺跡からは第Ⅲ文化期の細石刃（長さ一、二センチメートル）とそれを剥離するために調整された細石刃核が出土し、素材は長野県和田峠周辺の良質な黒曜石である。秋留台地では、秋川市二宮森腰遺跡から細石刃一点が発見されているほか、数点の遺物が知られているが、旧石器時代遺跡の本格的発掘調査はまだおこなわれていない。

多摩の旧石器時代遺跡は、野川流域や多摩丘陵が中心であるが、最近、立川市南部から国立市に流れる小河川、矢川流域に二つの遺跡が発見された。矢川の源流近くに位置するのは立川市向郷遺跡で、礫群一基と尖頭器やナイフ形石器が発見された。もう一つは国立市峰上遺跡で、南武線

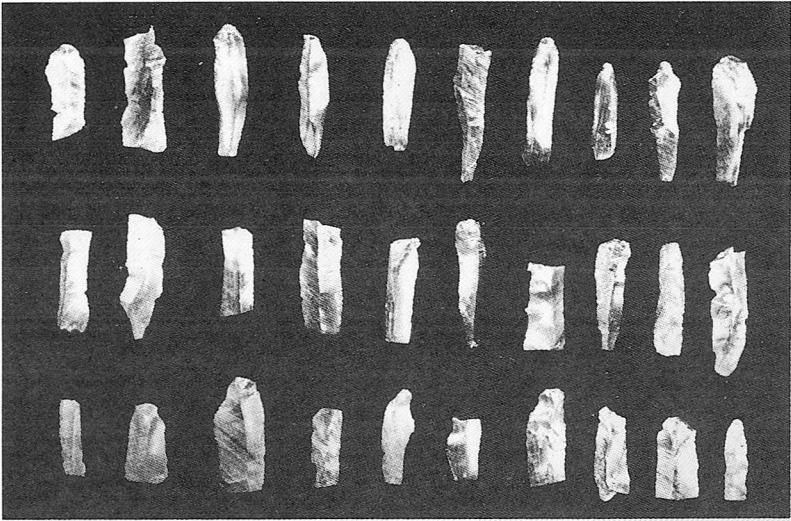


図 I-7 馬場遺跡（青梅市）の細石刃『馬場遺跡』より

矢川駅北東約一五〇メートルの立川段丘の縁にある。発見された遺構は礫群一基、配石六基、炭化物集中地点一か所、石器集中地点（ブロック）三か所などである。礫群には^{こざし}拳大の礫や焼礫が数十個集中したものが多く、調理との関係があるのではないかと考えられている。また、炭化物集中地点も焚火などの痕跡を示すものである。石器集中地点は数メートル以内に石器や石片が集中するものが多く、簡単な小屋がけをした住居の跡やときに石器製作の場であったりするところである。いずれにしても、これらの遺構は旧石器時代人の行動の軌跡であり、当時の人々の生活を知る上で貴重である。峰上遺跡からは、ナイフ形石器一三点、尖頭器四点、スクレイパー二点、敲石一点などが出土し、第Ⅱb亜文化期に属する。このように、本市の周辺でも徐々に旧石器文化の様相が解明されていくことが期待される。